

北方民族の系譜探る

きょうから北大とカナダ・アルバータ大など

礼文で国際発掘調査

【礼文】北大やカナダ・アルバータ大の研究者らによる国際的な発掘調査が24日から、町内船泊地区の「浜中2遺跡」で始まる。ロシア・バイカル湖周辺での発掘調査と同遺跡を比較し、アイヌ民族など北方圏の狩猟採集民族の生活環境や集団形成の過程などを探るのが狙い。中高生や一般対象の発掘体験会も初めて行われる。

(佐々木馨斗)

「バイカル・北海道考古学プロジェクト」と呼ばれる7年計画の調査で、今年3年目。北大アイヌ・先住民研究センターの加藤博文教授とアルバータ大のアンジェイ・ウエーバー教授が中心となり、総勢約80人が参加する。礼文島は5世紀以降、本州から北上する縄文人や、サハリンから南下するオホーツク人など複数の民族が往來の拠点としており、南北文化の交流を調査するのに適している。1回目の調査を行った2年前は新生児の墓1基のほか、犬や豚の骨、土器など約5千点の出土品を発掘。今年は区域を拡張し、8月18日まで調査する。また、子供たちにも島の遺産を知ってもらおうと、地元中高生を

対象にした考古学講座（午前10時～11時半、午後1時～2時半）の28月4日の発掘体験会（回）は、誰でも参加で

きる。同センターは「礼文島は過去1万年の人類史が累積したタイムカプセル。一緒に歴史のダイナミクスを味わってほしい」と話している。

